敷島の青い車その４

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
敷島の青い車その４

【Ｎコード】
Ｎ７６１０Ｄ

【作者名】
谷津矢車

【あらすじ】
某自動車企業の若き俊英、敷島くんが、またもや大和部長の部屋に駆け込む。さて、敷島くん、今度はどういう発明をしたのでしょうか…。不定期連載「敷島シリーズ」の第四弾です。ＳＦ、というくくりにはしてますが、とてもＳＦって呼べる性質のものじゃないですね。

いい加減くどいので書くのもアレなのだが、お約束なので、と言い訳させてもらいつつ書くけれど、某自動車メーカー・開発部門に属する若き俊英・敷島は、いつものように開発部長室に駆け込んだ。

「部長！新たな動力を開発しました！」

「またかね」

開発部長室の机の前に座る大和部長は、書類から目を上げず、明らかに生返事で返してきた。

「すまんが」大和部長は書類に目をやりながら続ける。「最近、目を通さねばならない書類が多すぎて、あまりバカバカしいことには協力できないのだ」

「バ、バカバカしい！？」明らかに気色ばむ敷島。

「だって、君の作るものはいつも失敗ばかりだ。前回なんて、ひょんなことでエンジンが止まっちゃったじゃないか。あんな失敗作ばかりじゃ、見る気にもならないよ」

前回、敷島の発明はいいところまで成功したのだけれど、あとすんでのところで失敗してしまった。そこらへんの顛末は、「敷島の青い車その3」を参照のこと（と、宣伝をかましてみる）。

さすがに、大和の言い分に敷島は噛み付いた。

「今回こそは、成功させる自信があります！」

敷島のあまりに自信たっぷりな声に、思わず大和部長は書類から目を上げた。大和部長の目に映る敷島の目もまた、自信に満ち溢れたものだった。

「……ところで」大和部長は最近の気がかりを口にした。「最近、社内である動きがあるのを、敷島くんは知っているかね」

「いいえ」敷島は首を横に振った。

「やはり知らないか、君らしいな」

大和部長はため息をついた。
「どうやら、社の上層部の方の方針で、“開発部をもう一つ新造しよう”という動きがあるようだ」
「へえ、もう一つ開発部を？」
敷島はあまり関係ない、とでも言う風に、曖昧に呟いて見せた。
どうやら、コイツには何も話がいっていないらしい。大和は口から漏れ出そうなそれらの言葉を無理矢理詰め込んで、言葉を継いだ。
「一応、“わが社の開発力の強化”というお題目を唱えてはいる。だが、実のところ、上層部は今の開発部門に不満がある、ということの表れだろう」
「なんで、ですかねえ」
「決まってる。今の開発部が、何の成果も上げていないからだ」
と、大和部長は書類の束を机の上でトントン、と叩いてから続けた。
「判るだろう？ワシたちは、あくまで企業人。で、あるからには当然成果も求められる。そういうものだ」
「…そうですよね」
敷島は俯いた。きっと、自分のしている研究が不毛だと一番わかっているのは、ほかならぬ敷島自身なのだろう。
「じゃあ、今回の話はなかったことに……」
敷島が、部屋から辞そうとした瞬間、大和は立ち上がった。そして、敷島に言った。
「敷島くん。今回君が作ったものに、自信はあるか？」
「もちろんです。でも……」さっき言われたことがショックなのか、俯きつつぼそぼそと喋る敷島。
すると、大和部長は書類の束を机の上に放った。さっきトントン叩いて揃ったはずの書類が、机の上で少し乱れた。
「自信があるなら、見にいってもいい」歩をドアの方に向けつつ、大和は言った。
「は？」
「ほら、時間がないんだ。早く行くぞ。試験滑走路だろ？」

「え、ということは…」敷島は、顔を大和に向けた。
「君の作った動力、見てやろうじゃないか。ただ、勘違いするなよ。いかに忙しかろうが、部下の作ったものに目を通すのは……」
「上司の務め、ですよね！」敷島の顔は、弾けんばかりの笑顔だった。
大和部長の机の上から、今の開発部から引き抜きを行なった上で、その引き抜きメンバーを主体にもう一つ開発部を作る、という旨の書類が滑り落ちた。

試験滑走路。
やはり、いつものように青い車が滑走路の真ん中に置かれていた。
「で？」
大和は訊いた。
「今回の動力は、何を燃料に動くんだ？今度は“勇気”か？」
敷島くんの開発する動力は、毎回“人間の思念”を燃料にする、という点で一貫している。なので、大和部長は「どんな燃料を使うのか」という一点を訊いたのだ。
すると、敷島は答えた。
「今回は、“不満”、これをエネルギーとして取り出す仕組みの動力を開発しました」
「“不満”、ねえ」大和は訝しげにつぶやいた。「前回の“怨念”と似ているような気がするが、大丈夫なのかね」
敷島は、胸を叩いて自信たっぷりに言った。
「前回の“怨念”、これはエネルギー源としては非常に有能でした。エネルギーの総量がとんでもなく多いですから。でも、“怨念”から取り出すエネルギーは、どうしても安定性の面で疑問符がついたんです。その点、“不満”から取り出すエネルギーは、取り出せるエネルギーの総量こそ“怨念”のそれに譲るものの、安定性はピカ一です。だって、そうでしょ？“不満”というのは、長くくすぶり続けるものですし」

「なるほどな」
大和は、やはりいつものように青い車を調べている。もちろん、不正防止のための措置である。だが、特に不正らしきものも見られないので、とりあえず乗ってみることにした。
「今日は、ワシが運転するぞ」
「え？僕が運転しますよ」
「いや、構わんさ」大和部長は手を振った。「ワシ、不平不満が多い人間でな」
「ああ、わかります」
「いや、そこは否定して欲しかったんだが」
そう不平を洩らす大和部長の横で、敷島は説明を始めた。
「……いつもどおりの操作です。まず……」
敷島は後部座席から何個もコードが取り付けられたヘッドギアを取り出した。それを、何の疑問も差し挟まず、大和はそれを受け取り、かぶった。
「かぶればいいんだろう？」
「はい。で、ですね」
敷島の言葉を遮って、大和部長は言った。
「ギアを、パーキングからドライブに替えるんだろ？」
しかし、そんな大和部長の言葉とは裏腹に、ギアはオートマチックのそれではなく、マニュアルのそれだった。
「……あ、すいません」敷島は頭を掻いた。「最近、どうやら予算が削られ気味みたいで……。マニュアルのものしか用意できなかったんです」
「なるほど」
その“不満”で、１０ｍは進めそうだな、と大和は思った。
「で、最後の操作です」敷島は言った。「いつも通り、“強烈な不満”を思い浮かべてください」
「強烈じゃないと不味いのか？」
「はい。お話したと思いますが、“不満”から取り出せるエネル

ギーというのは、その総量が少ないんです。なので、“強烈な不満”を想像しないと、この車は動きません」
「なるほど、めんどうだな」
「まあまあ」大和をなだめる敷島。
大和部長はハンドルを握り、左手でギアを握った。そして、久し振りのマニュアル操作を思い出すようにゆっくりと操作しながら、こう言った。
「あんまり隠し立てするのがイヤだからこの際言ってしまうが、ワシの不満はずばり、君だよ」
「え？僕ですか」
意外そうに目をぱちくりさせる敷島に、大和部長は追い討ちをかけた。
「ああ、予算はまるで湯水の如く使いきってしまう、しかもその成果は少ない。それにどうにも企業人としての危機意識が欠如している。正直、不満で不満でしょうがないね！」
芝居かかった口調だったが、あながち冗談にも聞こえない。その言葉に敷島は肩を落とした。
「……いや、まあ、その話はこの際どうでもいいですから、早く“不満”を思い浮かべてくださいよ。ほら、さっさとやっちゃいましょうよ、さっさと！」
「……いや、さっきから思い浮かべてるんだが」
「は？」
「だから」少し恥ずかしそうにしながら、大和は口を開いた。「さっきから、君への不満を思い浮かべているんだが」
その大和部長の言葉とは裏腹に、さっきから、青い車はうんともすんとも動いていない。
「おかしいなあ、故障かな？」
そう敷島は呟いて各所の部品を点検したものの、全く異常がなかった。
「……」

「……」

顔を見合わせた二人の間に、（いい意味で）気まずい沈黙が流れた。

（後書き）

＞「（いい意味で）気まずい沈黙が」
って部分、矛盾してますね。でも、そこらへんはお察しください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7610d/

敷島の青い車その４

2010年10月17日03時54分発行